
junction

雨。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

junction

【Zマーク】

Z9220A

【作者名】

雨・

【あらすじ】

駅ですれ違つたり、電車で隣り合わせになる見知らぬ人々。隣にいる人は何を考えているのだろう、と思つたことはありませんか？駅や電車で一瞬だけすれ違う人々の時間を少しづつ切り取つた、短編集です。 五話目に『チバリヨウ』という短編のシリーズ物も含みますが、そちらを「存じなくともお楽しみいただけると思います。

1人目の別れ

大してなんとも思っていないような顔をして、彼に別れを告げた。

「ばいばい」

ふつと笑つて笑顔の横に右手を上げ、優しく揺らしてみせる。

私の目はきっと今、三日月の形をしているだろう。作り物の笑顔の形。

「ほら。 そろそろ電車来るよ?」

彼の後ろに見える電光掲示板に取り付けられた時計は30分を指していた。電車の出発時刻は32分。本当に、もうすぐ行ってしまう。

時計を見ている振りをして、彼の顔を盗み見る。それは一言で言えば『複雑そうな』顔。眉をしかめて、口を真一文字に固く結んで。その瞳は私を見ているようで周囲を見ているようで、うろうろ落ち着かない。それこそが彼らしさ、なのだ。うろうろ、ふらふら落ち着かない可愛い男の子。その可愛さに、守つてあげたくなるようないじらしさに、惹かれたのだから。

「……俺」

「じゃあね」

「待つて」

私はゆっくりと首を振る。ここに一分間話し合つたところで何

になるだろう。

電車を待つ列の最後尾にいたはずの私たちが、いまや列の中盤に位置している。それほど時間沈黙で費やしたというのに、一分間で何が生まれるというのだろう。

あなたのその可愛い瞳に私は何度決心を揺るがされたことか。でももう、それに区切りをつけなきゃいけないのだ。

「俺たち、もう……ダメなの？」

とんでもない風圧と共に、ホームに飛び込んできた電車の音が彼の言葉をかき消す。

私は聞こえない振りをした。

「じゃあ、元氣で」

「待つ……」

電車からたくさんの人があふれて、彼はその波に飲まれた。ふわふわとした彼は波に逆らえない、それに漂うだけ。たくさんの人の肩にぶつかり、舌打ちをされ、にらまれながらもしっかりと立つている私とは違う。違うのだ。

出てくる人の波がやんだら、今度は席取り合戦に走る人の波に彼は引き込まれた。いや、引き込まれそうになっていた。

「

飲み込まれる寸前に彼の口が、私の名前を象る。

でもそれも波に飲み込まれ、ふらふら、うろつく。消えていった。

私はその消える姿を見送ることなく、人でごった返す電車に背を向けた。

振り向いてはいけない。立ち止まつてはいけない。

階段を駆け上った後も、足元だけを見てひたすら歩く。手を強く握り、腕を大きく振る。俯きながら、とにかく前進していた。

改札の方向に向かっているのか、それもよくわからない。たくさんの人とぶつかりながらも、それでも歩き続ける。とにかく、止まっちゃ駄目だ。その強迫観念だけが私を歩かせていた。進まなければ、囚われてしまう。何に？ 何かに。

何かを考えるのは大事ではない。今は無心で歩き続ける事が重要だ。

その私のつま先に、白い壁のようなものが立ちはだかった。いきなり進むべき道を塞がれて、私は立ち尽くす。

立ち尽くした私の足元に、待つてましたとばかりに雨が降る。いつの間にか泣いていた。

ぼとぼと、私の涙が自重に耐え切れず落ちていく。

顔を上げると、世界で一番不幸な女の顔が目の前にあつた。

……鏡。証明写真をとる機械の鏡だ。涙はぽろぽろと止まることを知らない。

私はその小さな箱に飛び込んで、カーテンを引く。そして溢れるものに身を委ねて、大声を上げて泣いた。

彼の呼んだ私の名前。ふわりふわりと私に絡みつき、離れない。それどころか私の心臓をゆっくりとでも確実に締め付ける。だから、止まつてはいけなかつたのに。

発車を知らせるベルの音が遠く小さく鳴り響いていた。

2人目の人間

ヒールの高いサンダルは、走ると甲高い音がする。周囲の人が顔をしかめるのと同じように、あたしだってこの嫌味な音が大嫌い。だから普段はなるべく音を立てないようにして歩くけれど、今はそうも言つていられない。そんなことしていたら電車乗り遅れちゃうから。

右、左、右、左。転ばないよう、ケータイの時計とにらみ合いながらも精一杯走る。

証明写真の機械の前を通つたといろで、明らかにおかしな声がした。

女の人の泣き声だ。カーテンの隙間から、白い綺麗な靴と細い足首が覗いていた。

……泣いている、中で誰かが。

右足、を出す前に、あたしは動きを止める。

右手に握つていたケータイを見ると、電車が来るまであと1分。ここから階段まで走つて、降りて……。瞬時にあたしに残された時間計算する。だめ、間に合わない。あたしはすぐに右足を前に出して、また走り出した。その音が、泣き声を踏み潰すようにしてかき消した。

駆け込み乗車は危険ですといつたアナウンスを無視して、閉まりかけたドアに強引に体をねじりこむ。周囲の人の嫌な顔を横目に、無理やりに電車の中側にまで移動した。相変わらずこの満員電車には辟易する。はあ、とひとつため息をつくと、隣に立っている女性がちらりとこちらを見た。

仕事帰りの〇〇といつた風体のおばさんに、あの細い足首を思い

出す。高そつな靴を履いていた。あの中で泣いていたのも、このおばさんくらいの女性なのだろうか。

……何で泣いていたんだね？。あんなところで、ひとりで、大声で。何かを失つたのだろうか、恋人とかお財布とかケータイとか。彼女の泣き方はそういう感じだった。そしてあたしは最低だ、電車なんて10分も待てば次のが来るのに、結局自分が大事なのだ。泣いている彼女を放つておいてまで電車に乗ったのだから。嫌な女。最低な人間。この電車に乗っている人間の中で一番最低だよ、あたしは。

電車が本格的に速度を上げ、あたしの体も大きく揺れ始めた。隣のおばさんやサラリーマンと体がぶつかり、剥き出しになっている肌に蒸れた肌が触れる。

鳥肌と共になんともいえない苛立ちがあたしを襲う。

それから逃れようと、右手に固く握っていたケータイを開いた。

『満員電車まじきついよー。もお、皆いなくなればいいのに！ 早く、ヒロに会いたい』

そこまで打つて送信する。

送った後に見直すと、自分の最低さがありありと表れているメールに少しおかしさを覚えた。やっぱりあたしはいつでもどこでも自己中心的なのだ。

すぐに返信が来る。

『皆サン仕事でお疲れなの。そんなこと言わず、頑張れ！ 駅では

俺が待つてるしさー笑』

ヒロの返事に、一気に癒される。そうだ、ヒロはいつも改札の前まで迎えに来てくれる。もしその迎えがなければ、ううん。ヒロという最愛の彼氏がいなければ、あたしはこの箱の中での昔に死んでいただろう。

ふと、あの痛々しい泣き声が耳元によぎる。

『ありがと。ヒロ、これからもずっと、迎えに来てくれる？』
『んな最低なあたしだけど』

送信ボタンを押しながら、もう一度読み返す。

ずっと、なんて。重かったかな。重いよね。
しかもなんかウザい。『最低なあたし』なんて言われた方は迷惑極まりないに違いない。

やっぱ送るのやめよう！

しかし、取り消そうとしたときには既に送信済みの画面が表示されていた。色々ボタンを押したせいで隣のおばさんに強く肘が当たってしまい、おばさんも負けじと押し返してくる。そんな満員電車では当たり前の現象も、ひどくあたしを落ち込ませた。

どうしてだろ、今日はいつもよりも車内が息苦しく蒸れているようを感じる。メールなんて、後悔するくらいなら送らなければよかつた。

そう思つたときに、ケータイ画面がメールの受信を知らせた。

『当たり前。最低でも何でも、大好きだよ。てか最低じゃないけど。最低だつて自分のこと嫌いだつて思えるつむは、まだ最低じゃないよ。多分。てゆーか、俺以外の男が迎え行くとか許せんし！ それよりお前可愛いんだから、痴漢とか気をつけろよ？』

ヒロのメールに、強張つていた類が優しく解けて、あたしは自然と微笑んでいた。

そして同時に少し悲しくなる。

最後の一文。やっぱりヒロも自分中心に物事を考えているのだ。それが人間というやつなのかもしないけど、目の当たりにするとやはり切ない。それともあたしの考えすぎ、かな。

でも。その自己中が、こんなにも嬉しいなんて人間というのは困つたものだ。

今のおたしの心の中は、ヒロに早く会いたいという気持ちで溢れかえっているのだから。

ヒロの胸の中で、彼女の事を話そう。証明写真の撮影用機械のかで、ひとり泣いていた女人の人の事を。そしてせめて彼女に、ヒロみたいな人が迎えにきてくれるようにと願おう。たとえあたしの独りよがりな偽善でも。

その途端、電車がカーブに差し掛かり大きく揺れる。隣にいたおばさんはバランスが取れなかつたのだろう、思い切りあたしに圧しつかってきた。重い。けれど強引に押し返す事はせず、自分の体でしつかりと支えてやる。先ほどまで肘を押し合つていたあたしにしては上出来な反応だと思う。しかしおばさんはそれに気づいているのかいないのか、すぐにつり革につかまつてあたしから離れた。

が、気がつくわけはないよね。彼女のおかげで少し足首が痛くなつたあたしは、どうせならやはつ押し返せばよかつたと胸の中で毒づく。

あたしの親切なんて、あつてもなくとも同じなのがもしけない。独りよがりなあたしなんか……。

「すいません」

声の方に顔を向けると、今しがた支えてあげたおばさんだつた。それだけではない、おばさんは会わせて目礼までしてくれた。あたしは思わず微笑んで、とんでもないですと答える。すぐにおばさんは視線を前に移したが、彼女の声はずつとあたしの中で響いていた。

よく、わからないけど。たかだかおばさんの一言がとてつもなく胸に染みる。

人間って、やつぱりうにうものなのかもしれない。

目的の駅まであと三つと迫っていた車内は、何故か先程よりもすがすがしい空氣で満けていた。

3人目の妄想

電車は嫌いだ。

正確には人の多い電車に乗ることが、嫌いだ。特に、夜仕事を終えたサラリーマン達で今にも破裂しそうなほどパンパンに詰まっている電車での帰宅は大嫌いだ。

真っ黒な窓に映る自分の不愉快そうな顔は、とても醜く、脂と化粧が浮いていた。今すぐでも脂取りシートで顔の汚れをふき取りたい。だが腕を動かす事すらままならないこの箱の中ではそんなことは不可能であつた。

電車の音に紛れてひとつ舌打ちをすると、隣の男が明らかにいやそうな顔をした。

私はそんなに小さいほうではないと思つ。それでも隣の男は私より頭一つ分大きく、この狭い電車の中、皆よりずつといい空気を吸えているのかと思うと、少し憎らしく。

田の前見えるのは密着して立っている親父の後頭部。人間なんでも慣れるものだというが、この景色にはとても耐えられそうにない。しかも独特の加齢臭。思い切り手で突き飛ばしたい衝動を抑えこむ。私の右隣、つまり背の高い男とは反対がわには、遊び帰りである若い女の子が携帯をいじつていた。こういう場所で携帯を開くという行為がつくづく私には理解できない。公衆の田の前で自分の私生活をさらすようなものだ。

私はその子のメールをさつきから5通は読んでいる。相手は彼氏。満員電車に乗っちゃつた、と嘆く彼女に痴漢に気をつける、お前可愛いからなんてふざけた事を繰り返している。ああ、いろいろする。

その女の子はこの狭いのに携帯をいじつているから、さっきから肘が私に当たつてているのだ。クーラーがついているとはいえ、この人數。ねつとりとした人の体温がとても気持ち悪い。

後ろに立っている男の鞄の角もさつきから腰に当たっている。

ああもういらいらする、私は何でこんなとこでこんな思いをしているんだろう、視線を上げると姿見となつた窓に、泣きそうな顔をした自分が映つていた。

前に立っている親父の肩から覗いていた顔は、すぐにまた親父の後ろに重なつて消えた。

降りるまでの我慢だ。そう言い聞かせてもイライラはあまり収まらない。

「いつのときは意識を飛ばすのが一番いいのだ。もう1年近くこの満員電車を体験する中でどうにか生み出した逃避方法だ。窓に見え隠れしながら映る自分の田を見ていると、それがだんだんと虚ろになつていいくのがわかる。」

意識を飛ばす、というより妄想するのだ。例えば隣に立っている男。彼はもしかしたら営業マンで今日も会社を何十社も回ってきたのかもしれない。何十冊ものカタログと愛想笑いと共に。その中で散々罵倒されもしだろう。昼には少し贅沢して少し高めの缶コーヒーを、タイを緩めながら飲んでいるに違いない。ほんのひと時のみ休憩。でもその間にも不安は決して休まない。

会社には戻らない。いや戻れない。契約取れるまで戻つてく
るな、

た、本当なら俺は営業なんかじゃない、技術職で入社したのだ。いやだが、三年、三年の我慢だ。そう前の部署の上司に励ました。でも本部で三年で本社に帰れるのか？ 契約数が部署最低の成績の自分が。

とにかく早く本社に戻りたい。

なんてカワイスウな男。

と妄想に夢中になつていると、いきなり車体が大きく傾く。腑抜けたように立つて、私は体を支えきれずとなりの女の子のほうへ倒れこんでしまつ。しかし彼女はいやそうな様子も見せずしつかりと支えてくれる。

ほんの少し嬉しくなつて小さな声でお礼を言つと、女の子も優しく微笑み返してくれた。意外と、いい子なのかもしれない。

つり革をしつかりと握りながら、隣の男に視線をやると、相変わらず仏頂面をしている。こんな暑苦しい中で爽やかに笑つている方がおかしいだらう。

隣の女の子はまたすぐに携帯をいじつていた。しかしその打つている文面は、たきほどとは違つた。

『隣のおばさん倒れてきたよ。どうしたんだろ？！ 真合悪いのかな……。でもお礼言つて貰えて嬉しい！ あー早くおうち帰りたいなあ』

おばさん。それはどう考へても私のことだ。私を心配するような文面も、要は私が年老いていることの説明に過ぎない。彼女はまだ他にもくだらない内容を打ち続けている。おばさんって私が。 29

歳の私が？ つかみ掛かつて問い合わせたい気持ちを、先ほどの親切を思い浮かべて何とかこらえるが、どれほどもつか自信はなかつた。

しかし、どうにか衝動が爆発するより前に電車が駅に着く。心持ち女の子の体を強く押しのけて、電車を降りる。涼しい、とはいえないがしかし確実に電車の中よりも爽やかな風に、大きく息をする。

背の高い男も、同じ駅だつたらしい。私の前を出口に向かって歩いていた。

ほんやつと、女の子のおばさん発言に打ちひしがれながら歩いていると、男の靴底が目に入つた。全く磨り減つていない。それどころか綺麗に磨かれたブランドものだ。スーツだつて高級ブランド……。鞄もそうだ。髪もきちんと整つていて、先ほどの親父の後頭部とは全然違つ。

あんぐりと口が開ききつているのに気づいて、急いで口を閉じる。改札から出て行く彼の姿は颯爽としていた。立ち止まつたままその後姿を見送ると、少し笑いがこみあげてきた。

ひつやつて駅の改札前で突つ立つて笑つていると、またおばさん具合悪いの、と思われてしまつだらうか。それもしょうがないのかもしれないな、と少し思つ。立ちっぱなし始めたから、かかとがジンジンと痛んだ。今日は帰りに、少し高めの缶コーヒーを買って帰る。明日もまた、この満員電車に乗らねばならないのだから。

4人目の過ち（前書き）

少々、暴力的表現がござりますので苦手な方はご注意ください。

4人目の過ち

触れ合ひ、には程遠い状態で僕はその箱の中でからうじて立つていた。どうしてこうも大勢の人間をひとつの中箱に詰め込めるのか。ある意味芸術的にも思える120パーセントという乗車率に、僕なんかの疑問が立ち入る隙は無い。

とりあえず隣に立つ女性に痴漢と間違われないよう両手をつり革に預けると、電車が動き出した。

その動きに前後左右振り回されながら、頭の中ではひとりの女性のことを考えていた。

松本小夜。

昨日の夜、とうとう彼女と一線を越えてしまつた。30日前になつてあんなに女性の扱いに戸惑う事にならうとは思いもしなかつた。瞳を閉じれば、小夜の悩ましげな表情が鮮明に浮かぶ。こんな息苦しい満員電車の中にも関わらず興奮しそうな自分を落ち着かせるため、あの言葉を言い聞かせる。

小夜。僕の……妹。

いつもながらこの言葉は一気に体の熱を引いてくれる。
おまけに胃の中身を吐き出したくなるような悪寒もセットで。今一日一日まともに食事をしていない僕が吐き出せるのは喉を焼く胃液ぐらいだけれど。

一ヶ月という期間だけ、東京で遊びたいということで彼女は僕の家に居候しにやってきた。今でも、あの時の衝撃は時折僕の体を強く揺さぶる。

若くみずみずしい肌、桃色に上気した頬、首筋に流れる一筋の汗、タンクトップから覗く胸、あまりに無防備に剥き出しな足、そして満面の笑顔。

全てに見とれて呆けた顔をしている僕に、彼女は優しく微笑んで僕を呼んだ。

「お兄ちゃん」と。

母からの連絡もあつたし、小夜が妹だといふことは頭では理解できた。

それでも体と心は言う事を聞かない。

彼女の求心力にぐいぐいと惹き付けられる自分をとめることはできなかつた。

大体、突然10年近くも会つていなかつた妹が、18歳の大人に成長して目の前に現れたのに、それを妹として認識しろという方が無理な話だ。

そうやつて何度自分に言い訳していただろうか。

小夜は、献身的に僕に呑くした。

彼女は毎日、朝・夜の食事を用意し、僕よりも先に起きて着るものを用意してくれる。まるで若妻を娶つたような気分に初めは緊張したものだ。

彼女も、僕の存在に困惑つてゐるようだつた。18のときに進学で家を出て以来、僕はまともに帰つたことは無い。彼女の記憶の兄は高校生で止まつてゐる。こんなおじさんが兄で、しかも一緒に暮

らしていふとなると困惑つのが当然だ。

そして都合のいい僕は、それが異性として意識している事であつてほしいと願つてやまないのだった。

小夜はよく僕の好物のハンバーグをこしらえてくれた。コンビニやファミレスとは違う不器用な形と温かさがたまらなく愛おしく、おこしかつた。一口ほおばると、生まれる笑顔は、自分でも驚くほどの柔らかさだった。

一人暮らしの長い身には、いちいち彼女のかわいらしさが身に染みた。人と暮らすと、新鮮なのに、兄弟だからだろうか、彼女の生活はそれに安らぎももたらした。

そう、若さや可愛らしさだけではない。その安らぎも含めて、僕は松本小夜という女性に恋をしてしまったのだ。

電車が、目的の駅に着く。

ここ最近は軽やかだった足取りも、今日は少し重たい。地面上に張り付いた靴底をはがすように、階段を登る。駅では若いストリートミュージシャンがなにやら恋の歌を描く歌つていて。その切なく下手くそな歌詞は、今の僕にぴったりだ。

僕は、一番してはいけないことをやってしまったから。

僕は、小夜を強引に抱いてしまったのだ。

きっかけは、小夜の言葉。もつすぐ夏休みも終わる、だからそろ実家に帰るね、という言葉。つまりまた僕はひとりになり、彼女と会えなくなるのだ。

僕は、小夜を強引に抱いてしまったのだ。

わかつてはいたが、田の前でそう宣言されると予想以上に傷ついた。僕はなんて愚かなんだろうか。まるで本当に小夜と結婚したような気分になつていた僕には、それは別れを告げる言葉にしか聞こえなかつた。

何がが、弾けた。

僕はその場に小夜を押し倒し、無理に口付けした。
昼夜関係なく何度も夢に見た、彼女とのキス。

でもそれは甘くも苦くも柔らかくもない。

ほとんど暴力に近い触れ方。多分、兄妹である僕らにふさわしい繋がり方だ。

小夜と一緒に、僕はテーブルの上のガラスのコップも倒してしまう。少しだけ残っていた中身の水がテーブルからじぽれ落ちるが、それを気にする余裕はない。

当然小夜は嫌がり、抵抗する。それでも僕は止まらなかつた。ただずつと、愛してる、行かないでくれ……そんなみつともない台詞を口にしていた。そして抗う小夜に、今まで高ぶつけていた思い全てを押し付けた。

溢れかえる水は静かにテーブルから滴り落ち、小夜の体を濡らしていった。

全て終わつた後、小夜は何も言わず泣いていた。

小夜は、僕が初めてではなかつた。それが救いでもあつたし、腹立たしくもあつた。小夜を他の男が抱いたのかと思つと、怒りどころか殺意が湧き上がる。

僕は、言つた。

愛している、と。兄なのにこんなことをして申し訳ないと思つてゐる。恨んでくれて構わないと。

愛していくとはなんてずるくて卑怯で便利な言葉なんだろつ。愛

しているからつて妹に乱暴していいはずがない。

次第に僕の声はか細くなり、そのうち消えた。沈黙が僕らを、やつとのこと包み込む。

小夜は生氣の抜けた顔で、ただ泣いていた。声もなく、静かに。泣いていた。

朝起きると、朝食とスーツが用意してあつて小夜は姿を消していた。

焦つて彼女の荷物を確認すると、全てまだ家に置いてあった。ほつと胸をなでおるす。

スーツは、僕の持つ一番高価なものだつた。何故彼女がそれを用意してくれたのかはわからない。

本当なら会社を休んで彼女を探しに行くべきだつたかもしれない。それでも僕は彼女と顔を合わせるのが怖くて、食事もほとんど残してそのままさつと家を後にしたのだ。

小夜は、どうしただろつ。

自分の部屋のドアの前に立ち、耳を澄ませる。無論、何も聞こえない。

鞄の中からキーケースを取り出し、ゆっくりと鍵穴に鍵を差し込む。乾いた音を立ててあつさりと鍵は開いた。

小夜が妹でなかつたら。そんな考え、馬鹿げてるのはわかってる。それでも考えずにはいられない。そうならば僕たちは……出会つてすらいなかつただろうか。

ドアを開け、ここ最近口癖になつてきた言葉をかける。

「ただいま」

しかし返事はなく、部屋は明かりすらついていない。

「小夜？」

手探りで電気のスイッチを押す。しかし小夜の姿はない。急いで居間に向かうと、ラップをかけられた夕食と共に一枚の紙切れが添えられていた。

「小……夜」

予感はしていたから、涙は出ない。それでも、僕の体は力なく膝から崩れ落ちる。

小夜は、去った。体を重ねた後の彼女の涙は、きっとそういうことだったのだ。小夜の手紙を何度も読み返し、納得する。これが当然の帰結。僕たちに未来などあるわけはなく、だからこそこんなに愛おしいのだ。

小夜の手紙を左右の手で半分に切り分ける。それを4等分、8等分とどんどん細かく破る。そして、ゴミ箱に捨てた。

底の浅いゴミ箱には、分別など知らん顔でコップが横たわっていた。

昨日僕が倒してしまったコップだ。取り上げてみると側面に小さなひびが入っていた。これでは使い物にならない。そう思って、小夜はこれを捨てたのだろうか？

床に座り、小夜が残したハンバーグのラップを剥がす。そしてコップと共にラップもゴミ箱へ捨てた。

そのままテーブルの前に腰を下ろす。ハンバーグ、恐らく最後になるであろう小夜の手作りのハンバーグと向かい合つ。

箸を手にして、丁寧に一切れだけ切り分ける。落とさないようしつかりと細い木の箸で挟み込んで、それを口に入れた。

冷たい。

それからは一気に食べ進める。
すっかり冷え切ったハンバーグを食べるうちに何故か涙が滲んできた。

出来損ないの形をしたハンバーグが、輪郭を失っていく。やっぱり、ハンバーグは出来立ての、温かいものが一番いいのだ。

4人目の過ち（後書き）

少し、というか大分詰め込んだ感が否めません……。
このような作品に目を通してくださり、誠にありがとうございます。
以上4作は電車内中心の短編でしたが、以降は駅を中心とした短編
が続く予定です。宜しければ今後ともお暇つぶしに読んで頂けたら
幸いです。

5人目の加速

「所田と青葉つてさ、『テキてんの?』

購買で買ったパンの袋を左右に引っ張りながら、伊智子が思々しげに呟いた。

「さあねえ。でも、そつなんじやない? この時期にあの様子だと

私は親が作ってくれた弁当のから揚げを箸でつまみながら答える。二一ト予備軍の恋愛事情なんて、興味はない。確かに、夏休みがかけた今、受験生にとつては本格的に追い込みの時期に入る。そんなときに休み時間も特に勉強する様子も見せず何やら親しげに話しているふたりが目に付くのは当然のことだ。

「つざいわー。本当。てかさ、聞いた? あの二人……」

「何?」

伊智子のパンの袋は未だに開かないらしい。引っ張られた袋の先がかすかに震えている。

「何か、夜一人で会つてるとこひを誰かが目撃したらしい、よつー風船が破裂するような音を立てて、袋が弾けた。

皆が食事に夢中な教室では誰もその音に驚いたりはしない。

昼休みにも関わらず、早めに食事を済ませて、問題集を開く。

誰が一番に始めたのかはわからない。でも今ではほぼ全員がそう

していた。この単語集も一周目に突入し、数ヶ月前に入れたチェックを尻目に次々と解いていく。

しかし、私たちとは別に昼休みを十分に堪能する人間だつてごく僅かだが存在する。

青葉伊鶴と、所田慶介。

噂によるとあの二人は大学受験をしないらしい。もし本当なら、最低だと思う。

この学校は進学校を銘打つてはいるだけあって、普通の高校より倍高い授業料を支払わねばならない。大体入学試験だつてかなりの難易度だ。

それだけではない。夏休みだつて2週間しかなかつた。あとは補習という名の授業で8月は埋まる。

それなのに、親の期待を全て無視し、学生としてのわきまえを放棄するような行為は、最低だと思つ。

あの二人に二ート予備軍といつあだ名をつけた人間の才能を褒めてあげたい。

* * * * *

「後鳥羽上皇の地頭罷免要求が拒否された摂津国の荘園は何か?」

「長江荘・倉橋荘」

伊智子が軽く笑いながら答える。続いて彼女が問題集に目をやり、問い合わせを読み上げた。

「承久の乱後、西国支配のために赴任した東国御家人を」

「西遷御家人」

彼女が言い終わる前に、答えてみせる。

私たちはこうやって問題を言い合いながら、塾の帰り道を駅まで歩いていた。これが日課とはいえ、私たちの間には常に緊張感が走っている。相手より先に、絶対間違った答えは口にしてはいけないという緊張が。

目指している大学も同じで、選択する科目も同じという私たちは、受験対策を相談する相手という以上に、良いライバルだ。絶対伊智子にだけは負けたくないという気持ちが、大学へ行きたいという思いよりも私を勉強へ駆り立てているといつても過言ではない。

そして伊智子も恐らく同じ。

「ね、今日はさ、市内の本屋行きたいんだ。この問題集も大分やりこんだし。次の買わない?」

「うーん……。どうしようかな」

今の時期に新しいものに手を出すよりは、今まで使っていたものをやりこむ方がずっと良い方法に思える。けれど心のどこかで『伊智子は買いつに?』といつはつきとした声が私を躊躇させる。

「とりあえず行くだけ行かない?」

「……そうだね」

まず問題集を見てみてから考えてもいいかも。心の声に抗えず、私はあっさりと伊智子に続いていつもは通過する切符売り場へ向かった。

* * * * *

市の中心地の駅は、じつは返している。

駅から近い市最大の本屋の参考書売り場を直進する。ずらりと並んだ赤本の横を通り、背筋に嫌な汗が流れた。その前に立つている人全てが敵なのだ。心持早足でそこを通り抜ける。

その先の参考書売り場で、私たちは無駄話をしながら様々な参考書を手にとった。

伊智子が欲しがっていた参考書は、数学のもので、お勧め参考書としてどこかで目にしたことがあった。

私もそれをパラパラとめくつながらじめらへ考えるが、結局はそれを戻す。

なんとなく、伊智子に勧められて買つ、といつ状況が気に食わなかつたのだ。

時計を見ると、時刻はもう一〇時を過ぎていた。私たちは今度は本当の早足で駅へ向かう。

しかし改札へ向かう途中、優しい声が耳をくすぐつた。

ふと立ち止まり、その声の方へ目をやる。どこででもいるようなストリートミュージシャンだ。

ギター片手に歌っている。その男性の前にほひとつ髪の長い女性が座つてそれに聞き入つていた。

「弥重？」

伊智子の声で我に返り、そこから目を離す。彼の声はそれでも私の耳から離れなかつた。

* * * * *

翌日。私は伊智子に適当な理由を言つて、塾帰りひとりでまた市内の本屋に来ていた。

あれから一日。伊智子が持つてゐる参考書を自分が持つていないことひどく不安でたまらなかつた。

急いで本屋に行き、同じ参考書を購入する。千円札数枚でこの不安から逃れられるのなら安いものだ。

しかしそれでも伊智子を誤魔化して買うのだから、つぐづぐ自分は負けず嫌いだな、と思う。

その帰り道、また同じように駅で歌つてゐる人がいた。
駅や周辺で歌つてゐる人は数人いるが、彼の声が一番よく響いているように感じた。

歌も、やさしくゆつくりと心に響く。

私の足は自然とその人の方へ進んでいた。

近づくほどにはつきりとしてくる彼の輪郭。
ギターを走る指先。大らかに揺れる上体。歌の調子に合わせてかすかに苗を舞う短い髪。そして駅の屋根ごと円を貫くように歌い上げる姿。

私はその姿にすっかり見とれていた。

歌い終わつたとき、男性の前にいた女性が拍手をした。つられて私も手を叩く。その音に黒髪の女性がこちらを振り返つた。
黒目がちな瞳に、長い黒髪。リスのようなその顔には見覚えがあつた。

「あ……青葉つ！ さん？」

「……あれー。深水弥重さんだ」

「え、まじでっ？！」

歌つっていたのは、所田慶介。二ート予備軍の彼だった。

* * * * *

「まあまあ、遠慮なく！ どんどん食べちゃって！」

私は一人に連れられてファミレスに来ていた。帰つて勉強したいといつ私を無理やり連れ込んだのだ。『こ馳走するから、といつ言葉で。

つまり、買収だ。『先生には内密にしてください』といつ、口止め料つてやつだ。

「いただきます」

遠慮なく目の前に置かれたハンバーグにナイフを入れる。

「でもまさか、クラスの人に見られるとはなあ」

クラスの人。その言い方にムツとする。確かにそうだけど、この二人のいうクラスの人は私たちの言つそれとは大分違うよつに感じた。

「そうだねえ、確かに驚きだよ」

「しかも、拍手してくれたし」

「やつぱり、あそこで歌つよ[[にしてよかつたなあ

「慶介は、歌上手だもの」

慶介。その響きに自分でも驚くぐらい肩がびくりと反応した。ナイフを入れた先から肉汁があふれ、まだ熱をもつ鉄板がじゅうと音を立てる。

隣の席には大学生のよつな二人組みが楽しそうに食事をしていた。目の前にいる二人も隣の二人と相違ない。私服のせいで。制服を脱いだ二人はひどく大人っぽく見える。どちらも地味な格好をしているが、それでも制服を着ているときよりずっと大人びている。何も食べていない一人の前で、制服でハンバーグを頬張る私。歳も学校もクラスも一緒のはずなのに、どこか違う。

こんなところ、『クラスの人』に見られたらなんて思われるだろう。

ハンバーグを半分ほど食べ終えたところでナイフとフォークを一旦手から離した。

「あれつ、深水さんもう食べないの？」

所田が大げさに身を乗り出してハンバーグを指差す。

「もつたいないな～。深水さんって少食？だからそんなに瘦せてるんだ」

「単に夕食済ませただけだから」

「ああそつか……。塾行つてたんだ？」

当たり前でしょ、とだけ言い放ち、私は口をティッシュで拭つた。安っぽいソースの色がくつきりと残る。ついでに腕時計を見るともう11時前だ。そろそろ帰らなくては。

「別に、こんなおじつたりしなくても先生に言いつけたりなんでしないわよ」

「へ？」

所田と青葉が両方ともきょとんとした顔で私を見つめる。

「だから、チクんなじつて言つてんの」

「え？ チクる気だつたの？！」

「いや、違つたけど、いつやって口止め料のハンバーグ奢るかい？」「一晩寝つてもいいつと……」

「口止め料？」

その途端、所田が大きく首を振り、体を前に乗り出した。彼の息が顔にかかるほどの距離に近づき、私は少し動搖する。

「違うよー。深水さん、俺の歌立ち止まって聞いてくれたでしょ？！ そんな人初めてだから、嬉しくて、そのお礼だよー。」

口止めなんてとんでもないよなあ、そう言って彼は振り返り、青葉に同意を求める。青葉はクスリと口元だけで笑い、そうねと答えた。

「まだまだ慶介は始めたばかりだから。奇跡に近いことなの。今日他にもね、サラリーマンが一人、一瞬立ち止まってくれたけどすぐに去つていちゃって。すごい良いステッ着た人だったから、いい音楽つてやつが区別できるのかもね、やっぱり

「でも、すごい、うまいじやん……」

それに歌つている姿、かつこよかつたし。その言葉は飲み込んだが、所田は両の手を大きく見開いて私の両手を強く握つた。

「あ、ありがとー！ そんな事言つてもうらぶる田がくるなんつ

……

「つまくとも駄目なの」

しかしその興奮を青葉が冷たく断ち切つた。

所田は一気にじょげて、私の手をゆっくりと離し、背もたれのに身を預ける。

「上手いだけの人間なら」まんといふのよ。全く、あんたは深水さ

んを見習いなさい」

「え？ 私？ なんで……」

「言つちゃなんだが私は音痴で、カラオケもここ1年避け続けている。そんな私のどこを見習うんだと苦笑すると、青葉は大真面目に言い放つた。

「だつて一生懸命、目標に向かつて努力してるじゃない。塾やらなにやら。特にあなたと斎藤伊智子さんはクラスでも田を見張るほどの努力ぶりだと思うわ。比べて慶介は、最近ようやつと曲を作り始めたのよ。どうにかストリートで歌うようにはなつたけど。うまいとか下手とかそれ以前に慶介には努力が足りないのよ。ねえ、深水さんもそう思わない？」

「そうなのだろうか。確かに青葉の言つとおりならば、努力不足の気がする。

「でも、歌の上手い下手って一種の才能じゃない、勉強と違つてさ」

「才能、ねえ。それもあると思つけど……。努力しないことには絵空事をうそぶくだめ人間にすぎないのよ。路上で歌う事だって、初めは嫌がつてたのよ、慶介」

彼らを「一ト予備軍とあざ笑つていた自分を棚に上げ、青葉の『だめ人間』という言葉の棘について反応してしまつ。

「青葉……さん、随分冷たいんだね、所田君に」

似たもの同士なのに。いや似たもの同士だからこそ、なのか。

「うーん。といつより、応援してゐるのよ。いや、イライラしているのかもしれない。才能とか夢とかそういう言葉に振り回されて、でも何もしない慶介に。折角こんなに歌も上手で、歌手になりたいといつ夢も見つけたのに、勿体ないじゃなー」

思わぬところで所田の夢、しかも歌手になりたいといつ言葉が登場し、絶句する。高3の8月になつてそんなこと本気で言つていいのだろうか。

「歌手になりたいの……？」

「う、うん……。何その田……」

歌つているとおとほほまるで違つ、自信のなさそつな顔で彼は一応肯定した。

私は、無理だよ、と言おうとしてやめた。

勝手にすればいい。一軒予備軍の考え方」となんて知つた事ではないのだから。

「俺だつて無理だと思つたけど、でも青葉がや。といつあえずやりもせず諦めてどうする、つていつから、ギター猛練習して、ストリートで歌つよつとしたんだ」

青葉が彼の言葉に付け加える。

「努力が報われるなんてわからない。だけど、努力しない事にはどうにもならない。スタートすらしないことになるでしょ。結果はそれに多少比例するはずだから。大学も、夢も。深水さんはそれがわかつてゐからあんなに勉強してるのよ」

青葉の言葉は私を褒め称えていた。しかし、それが私には不愉快でたまらない。

これはいわゆる褒め殺しつてやつで、実はけなしているよつこじか聞こえないからだ。

「何かずいぶん偉そつて言つんだね？」

「え、そつ？」

私の嫌味に全く反応をせず、素直に彼女は聞き返してきた。隣で所田が苦笑して口を開いた。

「うーん。こいつね、こないだ雑誌に漫画送つてさ。なんか特別賞？ みたいな受賞して、デビューが決まつたんだって！ だからいちいち説得力があるんだよ」

「え……」

青葉は変わらぬ笑顔で微笑んだまゝ、頷いた。

「一ト予備軍、の彼女はいつの間にか職を手にしていたらしい。いきなり大人へぐつと近づいた彼女は、大した変化も無く話し続ける。

「でもだからって漫画家になれたとは思わない。高校の合間にね、プロのアシスタントに行つてるけど、私なんてまだまだしきる。

それでもデビューだなんて、物凄い事ではないのか？

青葉には奢つた様子も自慢する様子も無い。

私は心に浮かんだ疑問を、そのまま口にした。

「二人とも……受験しないの？」

思ったより弱々しい声になってしまい、自分でも驚く。だがふたりは何の迷いも無くすぐに回答した。

「俺音楽系の専門行くよ」

「私はしないわ。これ一本でやつていくと決めたの。深水さんは？」
もしかして、このふたりは……なんていうか、馬鹿なんじゃないだろうか。

私は咳くよつとして青葉に答えた。

「国立……」

その途端、一人の顔が驚きで輝く。クラスの人としては標準的な回答なのに、ふたりにとつてはハイレベルな答えのようだ。

「す、す、す、すが」

「す、す、す、すか……」

「どうしてそこを？」

将来立派な法律家にならうと思つて。

いつもは、そう答えていた。こうしておけば、大抵の人が良い反応を示すからだ。だけこの一人の前では通用しない気がした。結局は伊智子に負けたくないのと、安定した学歴が欲しいだけに

すぎない。

「……」

答えられず俯く私に、一人の視線が容赦なく突き刺さる。

「人はいつも教室でこのような思いをしているのだろうか。夢に向かって、同じように努力しているにもかかわらず、大学進学をしないというだけで『二ート予備軍』と後ろ指を指される彼ら。

「あ、もう一時ね。そろそろ帰らないと」

そういうて青葉はおもむろに立ち上がる。

言外に『がつかりだ』という響きを感じるのは私の勘違いであつてほしい。所田もおうおうとしながらも、青葉に押され席を立つ。

「……待つてよ」

その言葉に一人がそのまま立ち止まる。

「悪い？ 夢もなくいいところに入りたって思つてるだけじゃ、黙目？」

悔しかつた。

私は間違つていなはずだ。少なくともあの教室では、こういつ風に肩身の狭い思いをするのは私ではなくふたりのはずだ。

しかしどうして、今ここで、負けたような間違つているような、嫌な思いでいっぱいにならねばならないのだ。言い放つた後、二人の顔を睨み付ける。

しかしうつたりともまたほかんとした顔をして、あつけらかんと答えた。

「憑くなんかないわよ」

「うふ。むしろむじょよ、夢もないのにそんなに頑張れるの」

拍子抜けする。

これで決まりだ。このふたりは馬鹿だ。
でもただの馬鹿じゃない。馬鹿正直で馬鹿真っ直ぐで馬鹿純粹な
……そういう馬鹿なのだ。

一ノ一予備軍といつあだなせ撤回しよう。

「……私も結局は馬鹿つてことか……」

ぬづけるな、馬鹿負けず嫌い？

張り詰めていた肩をほぐしながら、私も立ち上がる。

ふたりとも、よくわからないといった顔をしていたが、それでも
すぐに伝票を手に席を離れた。

* * * * *

「あ、やばい、もう電車来ちゃう。私先行くね」

切符を買ったのと同時に、私の乗る電車の名前が電光掲示板から姿を消した。

まだ買っている一人に別れを告げて私は走り出す。後ろから所田が叫ぶのが聞こえた。

「間に合わないんじゃない？ 今から走つてもーー。」

意識して聞くと、彼は随分通る、いい声をしていた。改札を通り抜け振り向かずに駆けぐ。

「絶対、間に合つよ」

私の声はきっと改札の向こうまでは届かないだろう。傍から見ると馬鹿のよつに必死に走り、ホームへ向かう。

ホームに降り立つと、ちょうど電車が停車したところだった。ほら、一生懸命走れば、電車に間に合つくらいはできるんだから。電車に乗つてしまえば、同じ。駆け込み乗車も、10分前から並んでいた人も。

どういう過程でも、どんなにかっこ悪くても、乗っちゃったもん勝ちだ。

私はそのままのスピードで電車に飛び乗った。

5人目の加速（後書き）

『5人目の加速』は、実は他の短編のシリーズものため、本作の中では一番の長さになってしましました。それにも関わらず、最後まで読んでくださった方には深く感謝申し上げます。

青葉伊鶴の偉そうな物言いに興味を持つてくださった方がいらした
ら、『チバリヨウ』や『反転する世界にただ恋をして。』という短
編にも彼女は登場しているので是非ご覧下さい。（所田慶介は前者
のみです）

それでは貴重なお時間誠に有難うございました！

6人目の再会

「「、「めんね、祐樹くん……」

目の前では、真っ赤な目を桃色のハンカチで支えるようにして、渕上さんが泣いている。何で泣いてるのかって……俺にもわからぬい。

バイトから帰り道、改札の前で腕をつかまれた。驚いて振り向いたら渕上さんだった。

正直に言おう。そのとき一番に心に浮かんだ言葉は、『やばい』だった。

そしてそれは顔に出でてしまったのだろうか、俺と田があつた途端彼女は弾けるように泣き出した。

「いやまあ……うん。大丈夫?」

改札前の柱のところで、渕上さんを覆い隠すようにして俺は立っていた。通行人から見れば彼女を泣かす駄目彼氏ってどこか。どうか知ってる人には目撃されませんように。

携帯片手に必死の形相で走っている男が俺らのほうにちらりと視線をやるのが見えた。あんなに走りながら人の事を注目する余裕があるなんて大したものだ。

まるで俺が泣かしてしまった悪い奴だと周囲の人々に責められるようで、とても居心地が悪い。それをせめて彼女に悟られないようにながら、俺は所在無く彼女を見守っていた。

渕上さんはもう何度もになるかわからない言葉をまた繰り返した。

「うん、全然大丈夫、もお～私どうしたんだろうね？ 本当迷惑だ

よねえ。『じめんね……』

そういうわれるとなんとも言い返すことが出来ない。そうだね、それじゃ、なんて言つて立ち去る事も出来ない。それを狙つて渕上さんはその台詞を口にしているのだろうか。だとしたらすごい女だな、と思つ。彼女がそういう人間じやないことは重々承知しているのだが。

二人の間に沈黙が流れる。

周囲の雑多な物音に、俺たちだけが取り残されていた。

渕上さんは、瞳から下をハンカチで覆つて、鼻を少しすすつた。その音だけが、俺たちの沈黙を少し和らげる。

渕上さんといつして顔を合わせるのは随分久しぶりだ。けれど、渕上さんと最後に交わした言葉は今でもはつきりと思い出せる。

だから、祐樹くんは私と仲良くしてくれたんだね。

あの時渕上さんは口元では微笑んでいたけど、泣きそうな顔をしていたような気がする。彼女の傷ついた様子に動転するばかりで、本当に泣いていたのかまではわからない。長い廊下を走つて去る後姿を呆然と見送るしかなかつた。あれは今年の春のこと。まだ桜舞う長袖の季節に、俺たちの交流は途絶えた。

もちろん何度も弁解しようとした。でもその度に、諦めた。

彼女は俺が近づくだけで体をこわばらせていたし、何より俺の方もうまい言い訳が浮かばなかつた。彼女を友達として、一人の人間として好きだという感情は確かにあつた、だけど何ではじめに話しかけたか。それはダチのため……。結局何を言つても逆効果に思えて、俺はそのまま時の流れに身を任せたしかできなかつた。

「渕上さん……どうしたの？ 渕上さんこの駅の近くに住んでたっけ？」

俺の記憶では彼女はこの駅の近くには住んでいなかつたはずだ。悲しいことに俺は渕上さん这件事を事細かに知つていたし、覚えている。それが俺が彼女に近づいた目的でもあつたから。

思ったとおり彼女は首を横に振る。

多分、偶然なんだろうな。白のタンクトップに黒いスカートという出で立ちから見ても、たまたまこの駅のある町で用事があつて、その帰りに俺を見つけた……ってところか。

でもそうだとしても何故、腕をつかんで引き止めたのだろう。

あのとき以来、ずっと避けられていたの。」

「…………」

「あ。ん、そうだな……」

「もしかしなくても、あの日以来かあ

「…………うん」

「私が告白なんてされたの生まれて初めてだつたんだよー？」

笑いを含みながら、渕上さんは上目遣いで俺を見上げる。

「知ってる」

だつて、渕上さんから直接聞いたし。そしてそれもきちんとダチに伝えたし。

俺は彼女の視線を受け止める事が出来ずに、彼女の立っている柱の向こうに目をやつて答えた。

渕上さんが生まれて初めて告白された相手は、俺の親友でもある。そいつの気持ちは紛れもなく本物で、俺は純粋にそいつの手助けをしたいと思つてただけだつた。

噂話の少ない、まじめなタイプの彼女に一番初めになんて話しかけたのかは、よく覚えていない。あまり男子生徒と話さない渕上さんは俺のなれなれしい態度を嫌がつていたのは覚えている。

「そんな事も言つたつづけー私？ うわー……恥ずかしいなあ……」

彼女は、ははつとハンカチの下で笑つてみせる。

俺、渕上さんの恋愛話ならほとんど知つてるよ。言葉にせず心で呴く。

だけどその分渕上さんも俺の恋愛について詳しく知つているはずだ。二人でなんど盛り上がりがつただろう。少なくとも話しているときには『ダチのため』なんて意識はなかつた。ただ一緒にいる時間が楽しくて、面白い。でもそれは彼女にとつて全部作り物にしか思えないのだろう。当然だと思つ。

「……ごめん、な」

渕上さんの目が大きく開かれる。

やつぱりそれを直視する勇気はなく、俺は頭を下げた。

薄汚れたスニーカーと、薄汚れた床だけをただただ見つめていた。

「本当、ごめん。今さら何て言つてもいやな思いするだけだと思うけど、俺は本当に夏……渕上さんと友達として楽しく接してただけなんだ。だから……」

「渕上さん、か」

「え」

「だつたら私も祐樹くんじゃなくて林くんって呼ばなきゃダメかな」

俺たちはお互いを名前で呼び合つまどに仲良くなつていた。それを知つたダチがぶち切れたのは言つまでもない。それでも俺は夏輝のことを友達としか思えないのは本当だつたし、どうにか宥めたけれど。あの日以来、その名を呼ぶことすら封印してきた。

「いや俺なんでもう何とでも呼んでくれて構わないしー。」

「ふふつ。じゃあ、私も。夏輝に戻してよ」

「う、うん……」

「ほら頭も上げて！」

いつのまにかハンカチをしまつた夏輝は、もう泣いてはいなかつ

た。その田元や鼻は赤く染まっているけれど。

「ね、覚えてる？」

「何を？」

「祐樹くん教えてくれたじゃん、春からこの駅の近くでバイト始めたって」

「そういえば、教えたかも」

「そうか、ちょうど彼女と仲良くなつた頃にバイトも始めたのだった。た。

「まだ、そこで働いてるんだね。今日は一か八かで来てみたんだけど、まさか会えるとは思つてなかつたよ。改札口のところで祐樹くんの姿見つけたときは、本当に驚いて感動したんだから……って泣いちゃつたけど」

肩まである髪が、彼女の動きと一緒にかすかに揺れる。

「でも、一か八かって……どうして？ もうすぐ学校始まるし、会えるじゃん」

「ひつして夏輝と、形だけだとしても仲直りに近づけたことは嬉しい。それでも、そこまでして駆けつけてくれる夏輝の真意が俺には読み取れない。」

夏輝は、その瞳をゆっくりと閉じた。長い睫の先は彼女の呼吸よりも早く震えている。

口元に、静かな笑みをたたえたまま、夏輝は口を開いた。

「私、転校するんだ」

一気に、夏輝以外の音が遮断される。

「こんな時期なのにね。親の都合つけてやつで」

彼女の瞳は濡れているが、それでも一生懸命優しい形を保とうと頑張っている。あの時と同じだ。事が終わって、一人教室から姿を現して、ドアの前に立っていた俺に向かって最後の言葉を発したあの時と。

電車の発車を知らせる音で、俺の聴覚が生き返る。数人の走り出す靴音と、何か話す声。

突然の変化に少し意識が混乱した。やけに、通る声が耳に残る。間に合わない、今さら走り出しても。もう間に合わない……。

「本当はね、9月いっぱいは登校できるはずだつたんだけど、急にそれもできなくなつちやつて。こないだの出校日が、事実上最後の登校になつちやつたんだ。それで……それで、ね。祐樹くんに、会つて話したくて。あの時とか、それから後の態度ですごく傷つけちゃつただろうなつて……思つてて」

両手を胸元で硬く握り締めて、震えながら謝る夏輝の言葉を俺は

遮る。

「そんなことない。俺が悪いんだし。俺、夏輝の気持ち考えずに、接して……本当に悪気はなかつたんだ。お前と話しててすげえ楽しかつたしさ。でもだからって友達にその話全部伝えたりして、俺馬鹿だなあつて、お前怒るのも当然だわって思つて……」

言いながら、自分の声がどんどん小さくなるのがわかる。どれだけ言葉を並べても、自分の気持ちなんて表しきれないし、今さらなんて言おうと言い訳に過ぎない。

両手が汗ばんでいてひどく気持ち悪くて、何度もジーンズにこすり付ける。

夏輝は静かに首を振った。

「そりや……傷ついたよ。私男の子にあそこまで心開いて話できたの初めてだつたから。自分の過去の恋愛に興味持つてくれる人もいなかつたし。純粹に嬉しかつたの。だからそれが祐樹くん自身じゃなくて、お友達のためにつていう目的から来てたのかつて思うと、私たちの友情つていうの？ そういうの全部嘘なんだなあつて……思つたのも事実だよ」

夏輝の潤んだ瞳はまっすぐ俺を見つめる。

「でもれ……私、顔見て泣けるくらいい」

雲がほろり、重力にひかれて夏輝の白い肌の上を滑り落ちた。

「祐樹くんのことが好きなの……。だから、だから……結局、嫌いになんてなれなくて。友達としてでいいから、近くにいたくて。でも祐樹くんはそれすら嫌なのかもしけないって悩んでるうちに、転校が決まっちゃつてや……」

好き。好き?..

あの日の、夏輝の悲しそうな顔が、目の前の彼女と重なる。そうだ、彼女は好きな人がいるといつて友達をふつっていた。それが、俺?..?

夏輝の急な告白は、俺を混乱させた。夏輝が転校する? そして俺が好き? それを伝えるためにわざわざここまで?

体中が心臓になつたように激しく打ち震えている。何を言えばいいのかわからずためらつている俺に、先ほどのハンカチである透明な雲を拭い去つた夏輝が笑顔で言つた。

「それだけ! それだけ言おうと思つて!..」

耳に残る、音。あのとき駆けていた人は電車に乗れたのだろうか?

「本当迷惑だよね、ごめん。忘れてくれて構わないから」

走つたけど、間に合わなかつたのだろうか。

それとも走りもせずに次の電車にしたのだろうか。

それとも……走つた事で無事乗ることができたのだろうか。

「じゃあ……それだけ、だから……じゃあ、ね」

夏輝はそつと柱から体を離し、俺の下を立ち去る。

待て、さうは思つても声にはならない。震えっぱなしの体はびくともしない。

俺はまた立ち戻りすだけで、夏輝を傷つけるばかりで、流れに身を任せらしかできないのか。

走れば、間に合つかもしれないのに。

途端に固まつていた右足に感覚が戻る。

思い切りそれを前に踏み出し、体を回転させて、彼女の名を呼ぶ。

「夏輝！　俺は　」

改札口で振り向いた彼女の髪が、風に乗つて舞い上がる。
そしてその瞳は、俺の言葉に引かれるようにまたも透明な霊をこぼすのだった。

7人目の疾走

夢中で駅を駆け抜ける俺の視界に、若いカップルが入り込む。柱に身を預けた女の子は、ハンカチで顔を覆い泣いていた。

その様子が未来と重なり、焦った俺はさらに速度を上げる。

未来にはああやつて慰めてくれる彼氏が今はいないのだ。もっとひどい様子で泣き喚いているかもしれない。

ポケットに財布、手には携帯。それだけの荷物で俺はベルの鳴り響く電車に飛び乗った。扉に一番近いところに立つて、目的地へ早く到着するよう、機械の箱に念じる。

時間を確認するために携帯を開くと、後輩からのメールが表示されたままになっていた。

『すんません。振られちゃいました。俺が悪いのはわかつてることで、でもやつぱきついっす。多分、一人で泣いていると思うから……先輩、よろしくお願ひします。俺が行くよりきつとじつといいはずだから』

中途半端なメール。だが俺には後輩の言いたい事は痛いほど伝わってきた。

だからって後輩の肩を持つ気はない。高校の頃から付き合つている年上の女がいながら、大学進学で県外に行つた途端、そこで次々と女を作つて遊んでいたあの後輩の事など。

まあ、優柔不断を絵に描いたような奴だ、そつなるのは自然の摈理なのかもしねり。

でも、後輩をそういう奴にした原因は少なからず俺にある。そ

の点については謝らねばならない。

『おい、未来今どこ？ あいつから全部聞いた。家いんのか？ 電話出るよ』

俺はずっと未来の側にいた。悪友として親友として時に男として。彼女はよく男女の友情に關して、俺のことを例に出し成立すると声高に言つたものだが、残念はずれだ。俺に關しては、少なくともはずれ。

俺はずっと、あいつが後輩と付き合つ前からずっと……好きだつたのだから。

だから知つてる。あいつが後輩の事どれだけ好きで、どれだけ傷ついていたのか。知つていて。

そして後輩が、俺の思いに薄々勘付いていたことも。そのせいであらぬ妄想に苦しみ、彼氏としての自信を失いかけていたことも。知つていてる。

メールの返事は一向に来ない。

携帯といい電車といい、機械というものに俺の念力は一切通用しないらしい。……まあ、人にも効いたためしはないけど。

どこかで野垂れ死んでんじゃねえだろうな。全く気の強いところがあだになるつていうか、こういうとき絶対未来は人に頼つたりしない。だからこそ心配なのだ。

扉に設置された窓の向こうには、夜の闇とそれを照らすイルミネーションがひたすらに流れしていく。光と闇の奔流を背景に、唯一つ動かない影のような姿。窓には、氣弱そうに眉を下げた俺の顔が映つていて。

俺は、最低なのだろうか。

あいつと後輩が別れたという知らせに、あいつを心配する気持ちよりもそれを喜んでしまう自分がいた。そんな自分の心に、俺はどう対処していいのか全くわからない。

それでも、奔流の中佇む俺の目は、あいつの事だけを見つめていた。

いきなり奔流が途切れ、気弱な俺もその姿を消す。車内アナウンスが、待ちわびていた駅名を告げた。

急いで電車から降り、改札に向かつて階段を駆け上がる。携帯の発信履歴にいくつも表示された未来の名前を、もう一度選択した。

彼女の家の最寄り駅についたものの、あいつが素直に家に帰つているのかわからない。

居酒屋にいるかもしれないし、友人の家にいる可能性も……ないとは言えない。

ホール音をBGMに階段を登りきるが、未来の応答はない。携帯の向こうでいい加減聞き飽きた女が留守番電話に接続する旨を俺に伝える。

舌打ちを返事に女を黙らせた。

未来に繋がらない役立たずの携帯をポケットにねじ込む。

どうしようか。

とりあえず、あいつの家に行つて様子でも見てみるか……そう思つたとき。

泣き声？

幻聴だろうか、未来の泣き声が聞こえるような気がした。

しかし周囲の人の様子を見渡すと幻聴ではないらしい。数人の人が立ち止まって辺りを見渡して、改札に向かつていた。

俺はその声の元を探す。

泣き声なんて、誰でも同じようなものかもしれない。でも俺には、泣き声の中に未来の周波数をかすかだが感じ取る。

この感覚はいつころから身についたものだったか。好きだから、といつたらそれまでだけど、とにかく勘というかなんというか、わかるのだ。俺は。

姿無き声の発信源は、思いのほか早く見つかった。

証明写真の撮影機、である。その中から、あいつの泣き声は響いていた。

間違いない。

俺はカーテンを一気に引いた。

「未来」

やつぱり。

未来はその小さな空間で泣いていた。

目の周りを真っ黒にして、鼻を真っ赤にして、下唇を突き出して。

「……こんな感じで何泣いてるんだよ、全く……」

左手を機械に持たれかけ、未来の顔を思い切り覗き込む。けれどそれを嫌がる様子もなく黙つたまま未来は俺をにらみつけた。

「やつちやつちやつ、何で、いるのよ」

未来にとつて俺に泣き顔を見られるのは初めてのことではない。初めてではないとしても、多少の恥じらいはあるらしい。そのぶつからぽうな話し方にはそれが少しだけ滲み出していた。

「ん、全部聞いたよ、あいつに

あいつ。未来の元彼氏で、浮氣者の、俺たちの後輩。

「ぐ、口が軽いんだから、もいつ」

しかめっ面をして悪態をつぐ未来は、いつも通りの彼女だった。
……その崩れた顔以外は。

「ほら、とりあえず帰るぞ

未来の腕を取り、立ち上がりさせようとする。しかし未来の体は思つた以上に硬く、動かない。

「う……

突然彼女は小さく呻いた。

「おい……？」

気分でも悪いのかと、つかんでいた腕を放し、彼女と同じ目線にしゃがみこむ。

「好きなの。本当は、結婚だつてしたい。ずっと一緒にいたい……」

吐き出すよにそういうと、未来は両手でチームのハーフパンツを握り締めた。彼女の顔もその手に向けられている。

赤くなるほど握り締められた拳は、その思いを俺に証明するかのようにぶるぶると震えている。

無性に、腹が立つた。

いくら彼女があいつの「」ことが好きだと知っていても、こいつ直接告白されるのは正直つらい。少しいらだつた口調で俺は問い合わせてしまう。

「じゃあ、なんで別れたんだよ」

「だつて……！」

髪が乱れるのも気にせず、未来は思い切り俺を見上げる。視線が合つた途端、その顔は大きく悲しみに染まつた。

「だつて、無理なの。耐えられないの。他の女抱いてる彼許せなかつたの。私そんなに大人じゃない、彼は年上つてことを勘違いして。私のこと全然わかつてない。なんでも許してくれるのが年上だつて。だから馬鹿なのよ、若いのよ。もう、さっさと忘れ去つてやるんだから」

そう一気に言い切ると、唇を噛み締めて、彼女はその悲しみに身を任せた。

わかつていた。俺は、誰よりも未来が年上の彼女としてのポジションに苦しんでいるのを知っていた。なのにそれを彼女の口から言わせてしまつた。それがどれだけ辛い事か、彼女の顔を見れば一目瞭然なのに。最後の言葉だつて、要はまだ忘れられそうにないという思いの裏返しに過ぎない。

「『じめん……。でも、あいつメールで言つてたよ。一人で泣いているだらうから、迎えに行つてくださいつて』

「……何、それ

興味のなさそつな口ぶりとは裏腹に、かすかに『元彼女』の顔が見え隠れする。

俺はまた、あの後輩の株を上げてしまったようだ。

ため息の代わりに、大きく息を吸う。

それら全てを吐き出すよつて、俺は思い切り立ち上がった。

「……よじつ！ 飲むか、今日は！ な」

「うつ……奢つて……」

やううううといひはぢやつかりしている。好きな女に泣きながら言われたときたら、断れる奴がいるだろうか。

「しょうがないなあ

今度は腕を掴まずに、右手を未来に差し伸べる。

彼女は『デニムで一拭いした後、左手を俺の右手に重ねた。キラリと光る薬指』と、俺はそれを包み込む。

「最後まで付き合つてよ？」

「……しょうがねえなあ

湿った手のぬくもりに、頬が緩みそうになる。

しかし時折指先に感じる冷たい金属の感触が、それを見事阻止してくれた。

指輪。左手の薬指には、まだ指輪がしっかりとはめられている。

恐らく朝どころか明日の昼まで俺はつき合わされるに違いない。悲しいことに未来の方がずっと酒に強いのだ。しかも、泣き上戸。いや、でもそれで未来の気が晴れるなら、大したことではない。

「優しいんだねえ」

「え」

意外な未来の言葉に、不覚にも顔が熱くなる。いや俺は、そんな失恋の悲しさにつけこむよくな男ではない、はずだ。それでも未来の褒め言葉はめったになくて、俺は舞い上がる。いや、舞い上がりかけたところで、未来はきつぱり言い放った。

「男なんて、身勝手で、中途半端に優しくて、でも結局は一番自分自身に優しいからもういらない！」

舞い上がりかけたところを一気に地面に叩きつけられる。

予想外の衝撃に少し（いや大分）くみながらも、そうやつて怒れる分元気があるのだと安心もする。ふらふらと歩く彼女を支えながら、喉元まで競りあがる言葉を、一生懸命飲み下した。

俺が、いるじやん。

改札を抜け、未来が行きつけの居酒屋を口にする。その左手は、確かに俺の右手を強く握り締めていた。

……薬指のリングもセツトだけ。

最終電車を知らせるアナウンスが駅に響き渡る。

俺は未来と共に歩き出した。明日電車に乗り家に帰る事はできるのだろうか、と少し心配しながら。

7人目の疾走（後書き）

最後までお由を通してください、誠に有難うござります！
一話目の主人公未来に戻ったところでJunctionは完結となります。電車やバス待ちのお暇つぶしに読んで頂けたら、これ以上幸いなことはありません！

ご覧のとおり、まだまだ未熟者です。修行の意味も兼ねて短編集、しかも恋愛含に挑戦してみましたが……。まだまだ課題は山積みです。

これからも精進して行こうと思います。

それでは貴重なお時間、有難うございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9220a/>

junction

2010年10月17日03時48分発行